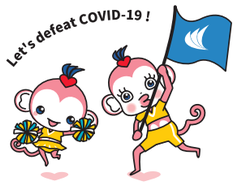
SAN-Ai

社会医療法人 三愛会 広報誌「さんあい」

Vol.17

50th ANNIVERSARY SINCE1970

大分三愛メディカルセンター６階病棟にて



ひとに笑顔を ちいきに“愛”を
社会医療法人 三愛会

社会医療法人 三愛会 広報誌「SAN-Ai」Vol.17（2020年10月1日発行）
発行元/〒870-1151 大分市大字市1213番地 TEL.097-541-1311 社会医療法人 三愛会 大分三愛メディカルセンター 広報委員会
社会医療法人 三愛会/www.san-ai-group.org/　三愛総合健診センター/www.kenkou-oita.com

※表紙写真は2020年７月に撮影した看護師のイメージ写真であり、誌面の内容とは関連はありません。






2020.7.28 中国・武漢にて初の感染者報告

2020.3.3 日本で初の感染者確認

2020.3 大分三愛メディカルセンターかぜ外来開始

2020.1.16 大分県で初の感染者確認

2019.12.8 大分県で98日ぶりの新規感染者確認

この地域を守る、という選択。

発熱した人々を、受け入れていく。

3月中旬、大分三愛メディカルセンターでは「かぜ外来」と銘打って、地域の発熱者を新たに診る枠を設けた。年明けからの新型コロナウイルス流行に伴い、全国的にも「発熱者を診ない」「発熱者を運ぶ救急車を受け入れない」という事態が相次いだことに対する、地域の病院としての一つの選択肢だった。

院内には不安もあった。しかし、「地域の医療を守る」という言葉を掲げ、奇しくも50年の年月を重ねる大分三愛メディカルセンターとしての答えは、不安気な顔でやってくる地域の人々を、一人一人しっかり診ていくことだった。

未曽有の感染症に対し、全国の医療機関がさまざまな手法で防護対応をする中、まずは院外にプレハブを設置する。通常の患者との動線を分けることで、感染リスクを最小限に留める。すべての受診患者を、いったん「コロナ疑い」前提として診るため、7月になってもスタッフの体はPPE（防護具）で覆われていた。

4月から8月中旬にかけ、約300名の患者が訪れた。幸い、コロナウイルス陽性者はごく少数であったが、他の医療機関で受診ができなかったり、行政からの指示で受診するなど、困り果ててたどり着いた人たちばかりだった。多くが単なる風邪や不調に過ぎず、簡単な処方で帰路についていったが、その顔には安堵の表情が多く見られた。

プレハブといっても、実質は屋外での診療に等しい。うだるような夏の暑さに、運用の再検討案も浮上していた。何より医療関係者が一番危惧していたのは、秋から冬にかけてのインフルエンザの流行。風邪、インフル、そしてコロナ。これらの疑いを持った方々が、冬は殺到してしまうことは容易に想像できた。それでも地域の医療を守るため。病院内では、毎週のように運営会議が開かれた。

8月14日金曜日、11時。この時も一部職員が打合せを行い、院内感染が起こった際の対応策や、これからのかぜ外来の運用案などの情報をアップデートしていた。






8.15 8月15日、陽性確認。

8.14 地域を巻き込まぬよう、業務縮小を決定。

8月14日夜。ある新型コロナウイルス陽性者の接触者として、数日前に大分三愛メディカルセンターを退院した患者が調査を受け、陽性が判明した。病院はその一報を受け、濃厚接触者を調査。以前より感染対策を行なっているため、厚生労働省が定める「濃厚接触者」はいない。それでも僅かな可能性は否定できない。行政に相談した上で、この時点で4名の職員のPCR検査を手配した。

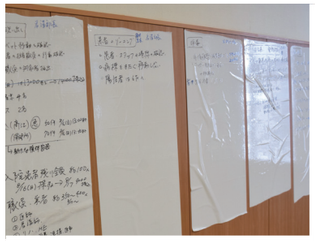
深夜に出た結果は、全員が陰性。一報を受けた病院長、検査部長は胸を撫で下ろし、その日の夜は静かに、何事もなく更けていった。

翌15日土曜日。朝の業務開始とともに一部の幹部が集められた。さらに万全を喫すため、範囲を拡大した「接触者のPCR検査」を調整する。行政から指示を受けたわけではなかったが、病院としての独自の判断だった。結果8月15日土曜日、11時。検査した8名のうち、職員1名の陽性が判明。大分市保健所へ連絡を行うとともに、すぐさま対策本部が設置された。

対策を練っていたとはいえ、未知のウイルス、未知の対応。慎重に、それでも迅速に対応が迫られる中、まず決められたのは一部業務の停止だった。初めてとなる「外来・救急受け入れ・入院患者受け入れの停止」。ウイルス汚染の可能性がある中、地域の人々を院内に入れることになる行為は「まず止める」。それ以外の選択肢はなかった。

幸いにも土曜日の午後であったこともあり、来院者は少ない。もとより面会禁止であったため、対策を練る猶予は僅かながら残されていた。

関係各所へ連絡を取り、速やかに対策を実行へ移す。そして並行して行われたのは、さらなる感染者の確認作業だった。来院した保健所職員への相談のもと、新たな職員、そして同病棟の入院患者のPCR検査を行政に依頼した。






大分三愛メディカルセンターの、長い日々のはじまり。

予想以上の感染力。
増え続ける感染者。

可能な限りの対策を講じ、そして夜がふけた。さらなるＰＣＲ検査の結果は、院長・森義顕の携帯電話にかかってくる予定だった。同15日、22時10分頃。電話口からの声は、「入院患者2名が陽性」だった。

どこかで、1名のみで済むと思っていた部分があった。院内に残っていた病院長、薬剤部長、検査部長、広報担当の4名は、医局にて一時呆然としてお互いの顔を見合わせた。

8月16日、8時15分。普段は閉じられた日曜日の会議室に、各部署の代表者たちが集められた。「クラスターとなる可能性がある」院長の言葉で、全職員の顔に緊張が走った。迅速に各部署の動きが決められていく。外来診療や救急受入れを停止するため、明日にも来院が予定されている患者をはじめ、消防署、納入業者など、さまざまな関係者への連絡が始まった。医師事務係による予約変更の電話は1000件を超え、その作業は深夜にまで及んだ。

同日9時、大分三愛メディカルセンターは、院内で新型コロナウイルスの陽性者が出た旨をホームページ上で公表し、同時に外来などの診療停止の措置を正式に行った。

長い1日、そして診療再開までの長い日々が、すでに始まっていた。そして夕刻、すでに退院し、施設へ入所していた元患者の陽性が判明。その連絡が地域連携センター主任のもとへ入ってきた。

8月17日、長い長い土日が明けての、初めての月曜日。平日にもかかわらず閉じられた正面玄関と、静寂に包まれた1階外来フロア。通用口で入院患者の荷物を受け付けるほかは、待合室や会計で患者を呼ぶスタッフの声もなく、院内の職員は粛々と対応業務に追われていた。受診希望の声には、診察したいがやはり出来ない、そんな葛藤があった。

ＰＣＲ検査結果は次第に判明していき、8月18日と19日に1名ずつ、職員の新たな感染が告げられた。感染対策を講じていた上での予想外の広がり。多くの職員の顔には、疲労と恐怖がにじんでいた。

8.19 8.18 8.17 8.16 8.15






8.28 8.25 8.20 8.17

Another Story
その“声”は批判であり
励ましだった

やはり起こってしまった〝声〟と、また別の、背中を押す〝声〟。

事態収束の鍵となった、
内部からと外部からの力。

時は少し進み、8月25日。文部科学大臣から「新型コロナウイルス感染症に関する差別・偏見の防止に向けて」という声明が、子どもたちや他関係者に発せられた。コロナに感染した人々を責めるのではなく、だれもが感染する可能性があるとして、温かい言葉をかけよう。そんな啓発を行う内容だった。

8月16日の公表以降、やはり起こってしまったのは、職員やその家族への就業・教育・保育の制限、そして差別だった。配偶者が出勤できないだけでなく、子どもが保育を受けられなければ職員自身も出勤ができなくなる。継続して医療にあたらなければならない病院にとって、出勤ができないことでの看護体制への影響は計り知れない。なによりも職員の精神的負担は膨れ上がった。看護部長は病棟運営に苦慮し、女性医師たちによる職員のメンタルケアも始まった。病院としても早急に対応を練ることなり、一部では正式に抗議を行うことも

8.28 8.25 8.20 8.17

- 8.17 22:00 入院患者2名の陽性が判明
- 8.18 9:00 ホームページで公表
- 8.18 12:00 前日検査の職員患者全員が陰性
- 8.18 15:30 すでに退院した患者1名の陽性が判明
- 8.18 16:00 大分県による会見 病院名を公表
- 8.19 8:00 外来診療等を停止
- 8.19 12:00 職員1名の陽性が判明
- 8.19 21:00 最後の感染者となる1名の職員の陽性判明

- 8.20 県内テレビ局にてコロナ風評被害のニュースが報道される
- 8.25 文部科学大臣が差別防止の声明を発表
- 8.28 県内テレビ局で コロナ差別の特集が報道される

あった。コロナに感染することは決して「悪」ではなく、それを謝罪する風潮は明らかに間違いだと、経験した病院だからこそ断言できるものがあった。クレームともいえる電話も僅かながらあったが、病院は毅然と対応している。

安易な批判が、経済や医療の逼迫を助長してしまい、ひいてはすべての人々の首を絞めてしまうことになる。全国的にも話題のこういった「声」について、大分三愛メディカルセンターはマスメディアからの取材を積極的に受けることにした。

とはいえ、病院が今回の危機を乗り越えられたのは、また別の方向からの「声」だった。本当に数多くの患者からの温かな励ましの言葉。関連する業者・企業、医療関係者からの激励の声。そして理解をしてくれる家族。病院の会議室には、支援として送られてきた物資があふれていた。「コロナ感染」という経験のない状況下において、職員の団結力は目を見張るものがあったが、それでも、周囲からの精神的な支援がなければ、事態の収束は遅れていたかもしれない。









8.21 感染拡大対策の緊急会議を実施
8.20 該当病棟フロアのゾーニングを実施
8.19 大分県による会見 関連6人目の公表
8.21 PCR検査のほぼすべてが終了 すべて陰性
8.20 外来再開に向けての感染対策を会議

これ以上、拡大させるわけにはいかない。

最大限ともいえる、拡大防止策を敢行。

温かな声に励まされながら、徐々に状況を打開していた中、8月19日までに合計6名の感染者が確認され、「クラスター発生」と判断された。2名に関しては、一度目のPCR検査の結果が陰性であったものの、発熱による再検査で陽性が確認された。病院に限らず、こういったケースは大分県内でも目立つようになっていた。

立て続けの増加。一時は絶望的な雰囲気が漂っていたが、全スタッフが「これ以上増やすわけにはいかない」という想いを胸に、徹底的な対策はさらに強固なものとなっていった。

未だウイルスが潜んでいる可能性を鑑み、8月20日、感染者が発生した当該病棟は、医局長、救急科医師の指揮のもと、最大規模のゾーニング（エリア分け）を再構築する。清潔・危険エリアを明確に分け、更衣・食事・休憩などについても徹底的に場所を隔絶した。

病院は、当然ながら入院患者のケアを止めるわけにはいかない。病棟スタッフ全員が「自分も感染している」という前提のもと、防護服を装着して看護ケアにあたり続けた。家族を想えば、家に帰ることすらリスクが頭をよぎる。最前線の看護師はもちろん、全職種の精神・身体的ストレスが、日に日に膨れ上がっていった。

その緊張を和らげていくのは、お互いの励ましの声、そして徐々に結果が判明していく、関係者の「PCR陰性」の報告だった。行政への依頼、もしくは外注での検査の結果、8月20日以降はすべて陰性。過去の6名はすべて同一の病棟内での患者・職員であったため、それは同時に、他のフロアが安全である、という意味でもあった。

陰性証明書を発行し、家族の勤め先や学校、保育園に持参した職員も多い。今回の経験を受け、感染症に対して必要な対応・不必要な対応というものを、職員は身をもって学んだ。願わくば、コロナ禍の今を生きるすべての人々に、こういった正確な認識が広がってほしい。









8.24 感染拡大対策の緊急会議を実施
8.21 該当病棟フロアのゾーニングを実施
8.19 大分県による会見 関連6人目の公表
8.24 PCR検査のほぼすべてが終了 すべて陰性
8.21 外来再開に向けての感染対策を会議
8.19 業務再開の情報を公表

これ以上、拡大させるわけにはいかない。見えてきた、収束と希望。

「安心」を伴う再開へ向けて。

感染者の増加が止まり、院内にはようやく明るい兆しが見えつつあった。「まだ先生に会えないの？」「まだ救急患者さんを受けてもらえませんか？」、そんな声も多く聞こえ始めた。感染拡大を抑えられた以上、次に着手しなければならないのは「再開」への道筋をつくる作業。一連の感染は収束したとはいえ、今回のように、ウイルスは新たに突然やってくる。本当に大変なのは、再びウイルスが襲ってきた時、感染を防ぐことができるような「これからの万全な体制づくり」だった。

冬場のインフルエンザ流行期を懸念しているように、新型コロナウイルスの症状は、通常の風邪などとほぼ見分けがつかない。かぜ外来での経験をもとに、発熱の確認はもちろん、玄関先の時点で問診を徹底することが決定された。リハビリテーションなど、患者と密にならざるを得ない業務も多く、内視鏡検査、手術なども同様のことがいえるが、それらは簡単に「延ばす」ということができるようなものではない。「仮に感染者であったとしても、ウイルスを受け取らないように防護する」という考えのもと、スタッフはマスク・フェイスシールド・防護ガウンなど、常に重厚な装備でお互いの身を守り、「欠かすことのできない医療」を遂行することになった。救急受入れに関しても同じことだった。2次救急病院として、地域の救急の一翼を担う、その機能を一刻も早く復活させたかった。

長い一週間が終わりゆく。週末、ホームページやプレスリリースなどで、診療再開の一報を公開した。段階的な再開として、まずは健診業務を担う三愛総合健診センターの再開を翌月曜日に控える。問診用紙や発熱チェック機器の用意などに追われる中、職員の表情には、疲労とともに僅かながらの希望の光が見え隠れしていた。

新しい一週間が、また始まる。

業務、再開。戻ってきた日常。









8.31 8:15 外来診療（再来）
外来リハビリ再開

8.29 8:40 該当病棟の再度のPCRの検査結果が全て陰性と判明

8.27 10:00 該当病棟のゾーニング解除

8.25 8:00 一部制限していたHCU業務再開

9:00 全面的な業務再開の予定を公表

8:15 外来・救急受入れなど全面的に業務を再開

続くコロナ禍の中、患者を迎えられる喜び。

8月25日、火曜日。再来患者のみではあるものの、外来診療が再開された。玄関には問診のためにスタッフが立ち、出入り業者は別フロアで対応する。ドアの前にはいたるところに「手指消毒を」という貼り紙が張られ、職員にはいつになく緊張感が感じられた。

それでも、「いつものように」患者が車を停め、バスから降り、玄関を通り、待合室の椅子に座る。少し距離を置きながらも、いつもの医師、いつもの看護師に身体の様子を伝え、時に笑顔もこぼれる。少しだけ、いつも以上にお互いを気にかける気持ちを胸に、いつもの大分三愛メディカルセンターの姿が再び見えてきたようだった。

「心配かけたね」「心配だったよ」。お互いの声が交わされ、日常のざわめきが外来フロアに戻ってきていた。

感染が発生した8月15日以降、当該病棟では未だ延々と厳戒態勢が敷かれていた。「危険」エリア内での看護ケア業務。看護は常に提供され続けなければならない。全身を防護服で固めての業務は、日々続いた。そして、当該病棟職員については再度のPCR検査が進められていた。

結果が判明したのは、外来再開の同日25日の早朝だった。検査部長からの「全員が陰性です」の報告に、会議室は歓声で溢れかえった。

ウイルスとの闘い自体には、未だ終わりは見えていない。とはいえ、一つの収束を迎えることができた…そんな想いが、すべての職員のもとへ安堵と共にやってきた瞬間だった。

病棟の厳戒態勢は解除され、そして翌週8月31日、月曜日。新患受付、救急受入れ、入院患者の受入れ…ほぼすべての業務が再開した。朝から多くの患者が来院し、救急隊からの電話も多数かかってきた。強化した感染対策と通常業務で目まぐるしいながらも、職員には清々しい表情が溢れていた。

コロナ禍、未だ緊張感のある日々は続く。それでも、大分三愛メディカルセンターにはひとまず、日常という幸せが帰ってきた。



コロナウイルス対策会議にて

地域医療を担う使命感、再び。

ご承知の通り、当院の入院患者さま・医療従事者に新型コロナウイルスの感染が確認され、8月15日から8月30日にかけ、診療業務縮小の措置をとって参りました。かかりつけの患者さま、地域住民の皆さま、連携医療機関・介護施設の皆さま、救急隊の皆さまには、多大なご迷惑とご心配をおかけいたしました。

当院は早くより感染対策を講じてまいりましたが、今回ウイルス侵入を100％完全に防ぐということの難しさを痛感した次第です。今後も、さまざまな企業や学校、そして医療介護機関で感染が発生することが予想されますが、ぜひ正しい情報を取り入れ、感染した方々・企業などに対して温かな心で接していただければ幸いです。

当院でも、救急や入院などにおいて検査体制を強化するなどし、今後も地域の医療を担って参ります。コロナ禍は今後も続いていきますが、当院としての地域の役割を果たし続けられるよう、努力いたします。

最後になりますが、今回、数多くの患者さま、地域の方々、関係各社さまから、温かいご支援、ご声援をいただきました。心より厚く御礼申し上げます。

大分三愛メディカルセンター 病院長／森 義顕



かぜ外来での検体採取にて

春、必ず咲く花のために。

「コロ助ごときには負けられん」。それが検査部の合言葉でした。ところが今回の戦いにおいて、臨床検査技師がウィルスの正体を暴くための武器はPCR検査しかありませんでした。PCR検査とは、病原体が持つ特異的な遺伝子配列をキーに、採取された検体からその病原体を検出する検査。知識も技術も高い専門性が求められ、更にその実施には、感染防御のための特別な設備も必要になります。つまり、通常の病院ではハードルが高く、当院のみならず大分県内でも未だに十分な検査態勢は整ってはおりません。

未知とのウィルスとの戦いの中で、臨床検査技師としての力が十分に発揮できないことを悔しく、悩みました。「検査を行うこと」を生業としている臨床検査技師の、「検査ができない」というストレスが如何ほどであったか。それでも、これまで培ってきた臨床検査の知識とスタッフのチームワーク、そして何より院内の多くの皆さまからの温かい励ましが支えとなり、今回はどうにか乗り越えることができたと思っております。

未だ予断を許さない状況ですが、PCR検査の実施体制に加え、抗原検査、生化学的分析検査等の充実など、自分たちにできることはすべて惜しまず、今後再び来るであろう感染の波を、万全の体制を持って迎え撃つ所存です。

患者さまにおかれましては、どうか安心してご来院ください。

大分三愛メディカルセンター 検査部長／佐藤 啓司

伝えることで、闘っていく。

本来、本誌10月号は、三愛会の事業所「三愛呼吸器クリニック」の特集を予定しており、すでに各方面へ誌面制作の手配を行っていました。

8月15日に始まる今回の新型コロナウイルス感染症発生を受け、内容の縮小もしくは休刊の判断を余儀なくされた局面がありました。ですが、今回の一連の出来事、やはりお伝えしないわけにはいかない。そんな想いに至り、今回の特集となりました。

コロナウイルスについては、個々人としても法人としても、その危機に直面した時、答えのない難しい判断に迫られます。さまざまな情報が断片的に、もしくは捻じ曲げられて伝播されてしまう現代。未知のウイルス、不透明な内情。そこから生まれる、患者さま・関係各社・そして職員とその家族の膨大な不安を取り除くべく、大分三愛メディカルセンターはできる限りの情報公開に努めるように舵を切りました。感染の経緯、今の状況、対応策について細かく記述し、ホームページにアップ。同時に県内マスメディアへプレスリリースを提供しました。病院内だけで400名以上、法人全体では700名以上の職員が在籍するため、内部に対してすら情報が錯綜しがちな現場環境。「とりあえずホームページの内容をみておけば、誰でも把握ができる」というところまで求め、内容を更新していきました。外部の医療介護機関からも、「状況、よくわかりました」とのお声がけをいただき、それによってご支援・ご協力、さらには発生後の動きまでも、少なからずスムーズになった気配が見て取れています。

実際に感染拡大を防ぐ、という動きの中には、こういった「情報伝達」という手段も確かにある。それを確信できた機会でもありました。

未知のウイルス。この脅威に打ち勝っていくためには、とにもかくにもできる限りの情報共有をし合うに限ります。

流行から半年以上経ち、このウイルスに関わった全国・全世界の人・医療機関がその経験をわかちあうことで、収束への道筋が少しずつ見えてきているのです。



今回、大分三愛メディカルセンターは院内発生真っただ中にも拘わらず、多くのマスメディア、主にテレビ局の取材をお受けしました。賛否もあったかと思います。

それでも、新たな感染症の実態を知っていただくため。コロナ感染による風評被害や差別に苦しむ人がいることを伝えるため。地域の皆さまへ現状をお伝えし、少しでも安心していただくため。あえて「積極的な周知」への行動を選択しました。

一旦の収束を経て、約一ヵ月。スタッフや患者さまの声でざわめく、「いつもの」外来フロアをのぞいてみると、この判断は間違いではなかったかなと、一応の納得を感じているところです。

再びどこかで起こるであろう、感染症発生の事態において、当院の経験が少しでもお役に立てることがあれば、本誌を制作した本懐を遂げられたのではないかと思います。

最後に、今回特に、当院に関する情報周知を積極的にご協力いただいた、県域民放テレビ各局・広告代理店各社関係者の方々に、厚く御礼申し上げ、本誌の結びといたします。

大分三愛メディカルセンター
広報委員会

［ 社会医療法人 三愛会 ］

大分三愛メディカルセンター
三愛総合健診センター

所　在　地　〒870-1151 大分県大分市大字市1213番地
T　E　L　097-541-1311
F　A　X　097-541-5218
病　床　数　190床
診　療　科　脳卒中センター、消化器病・内視鏡センター、
運動器センター、救急外傷センター（ER）、人工透析センター、
画像診断センター、リハビリテーションセンター、
救急科・外科・消化器外科・心臓血管外科・呼吸器外科・
乳腺外科・大腸肛門外科・脳神経外科・整形外科・
泌尿器科（人工透析）・形成外科・内科・総合診療科
・消化器内科・呼吸器内科・循環器内科・糖尿病内分泌内科・
リウマチ科・神経内科・放射線科・リハビリテーション科・麻酔科
専門外来受付　8:15～12:00/13:30～17:00
※診療開始時間は診療科によって異なります。
休　診　日　日曜日・祝日・土曜日午後
※但し、救急・時間外診療は24時間体制です。
認定施設　二次救急指定病院、大分DMAT指定病院、DPC対象病院、
日本医療機能評価機構認定病院

介護保険相談センター さんあい
（大分三愛メディカルセンター内）

T　E　L　097-542-7409
サービス　居宅介護支援、介護予防居宅介護支援

わさだ訪問看護ステーション
（大分三愛メディカルセンター内）

T　E　L　097-541-7007
サービス　訪問看護、介護予防訪問看護

のつはる診療所

所　在　地　〒870-1203 大分市大字野津原906番地の1
T　E　L　097-588-1311
診療科目　外科・脳神経外科・内科・整形外科・リハビリテーション科
病　床　数　19床
サービス　通所リハビリテーション（デイケア）、介護保険相談センター

三愛呼吸器クリニック

所　在　地　〒870-1143 大分市田尻419-1
T　E　L　097-541-2588
診療科目　呼吸器内科・内科
サービス　呼吸リハビリテーション
HPアドレス　kokyu-oita.com



たばるクリニック

所　在　地　〒870-1154 大分市大字田原字深田936番地1の1
T　E　L　097-541-2345
診療科目　外科・内科・消化器外科・リハビリテーション科
サービス　訪問看護ステーション

介護老人保健施設 たばる
（たばるクリニック併設）

T　E　L　097-542-4139
サービス　入所サービス、短期入所療養介護（ショートステイ）、
通所リハビリテーション（デイケア）

グループホームたばる
（たばるクリニック併設）

T　E　L　097-541-5298
サービス　入所サービス

介護老人保健施設 わさだケアセンター

所　在　地　〒870-1151 大分市大字市字大坪11番地の2
T　E　L　097-541-6655
サービス　入所サービス、短期入所療養介護（ショートステイ）、
通所リハビリテーション（デイケア）
HPアドレス　wasada-care.com

有料老人ホーム さんさん

所　在　地　〒870-1151 大分市大字市566番地の3
T　E　L　097-529-5580
サービス　住宅型有料老人ホーム

さんあいヘルパーステーション
（有料老人ホームさんさん内）

T　E　L　097-529-5582
サービス　訪問介護、介護予防訪問介護

［ 社会福祉法人 三愛会 ］

特別養護老人ホーム そうだ藤の森

所　在　地　〒870-1123 大分市大字寒田202番地
T　E　L　097-567-8822
サービス　特別養護老人ホーム、短期入所生活介護（ショートステイ）、
デイサービスセンター、介護保険相談センター

天領ガーデン・ふれあい館

所　在　地　〒870-1143 大分市大字田尻高尾783-1
T　E　L　097-578-7122
サービス　訪問看護ステーション、ヘルパーステーション、
看護多機能ホームふじっこ、元気デイきらら、
デイサービスひなたや、天領ふれあいサポート

特別養護老人ホーム 天領ガーデン
（天領ガーデン・ふれあい館内）

T　E　L　097-574-7500
サービス　地域密着型特別養護老人ホーム、ショートステイ